博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	村田晶子
論　文　題　目	「おとなの女」の自己教育思想形成への組織化研究 －国立市公民館女性問題学習・保育室活動を中心に－

審査要旨

本論文の目的は、女性差別を克服し、民主主義社会の形成主体を育てる学習のあり方を明らかにすることにおかれている。村田氏は、近代日本における社会教育、とりわけ成人女性を対象とした婦人教育が、良妻賢母主義に依拠して行われ、民主的な教育、社会教育を追究する第二次世界大戦後においてもなお、良妻賢母主義からの脱却が課題であったととらえ、真に成人女性の解放をめざす学習のあり方や学習コミュニティの形成のあり方を追究する問題意識を強く持つ。この問題設定に立って、1965 年から現在まで行われている国立市公民館における女性問題学習・公民館保育室活動を事例として、成人女性の学習論の抽出と学習コミュニティの形成過程を明らかにすることに取り組んだ。研究方法として、社会教育実践分析研究、学習過程研究における到達点として示される学習記録の分析を行い、〈学び合うコミュニティ〉の生成・展開過程を丹念に跡づけ、相互に主体的な関係の中で発展する一人ひとりのアイデンティティの発展を、人間観、教育＝学習観、女性観、公共性認識等の展開としてとらえている。

序論において論文の問題設定がなされうえで、第1部において、社会教育実践分析研究と女性問題学習の研究方法の検討がなされている。それらをもとに、第 2 部は全 7 章から構成され、国立市公民館における学習実践の記録を手がかりとして、長期にわたり実践しつつそれを共同で省察し再構成するサイクル、ならびに学習の記録を共同で書き、読み合う検討のサイクルを併せ持つ〈学び合うコミュニティ〉の形成、発展をとらえ、結論において、社会教育学としての研究のあり方を述べている。

以上のような内容でまとめられている本論文に対して、審査委員会において慎重に審査を行った。

（1）教育学の分野で、従前において「社会教育」は認知されてきたが、「社会教育学」は認知されてこなかった。その理由の一つは、社会教育実践は存在しても当該実践に対する明確な科学的方法論を伴った分析研究が欠落していたからであるが、本論文は、1965年から現在に至るまで国立市公民館において主として女性たちが自ら実践を共同で省察し、事実に基づいて分析的に研究し、互いに〈学びあうコミュニティ〉を形成してきた実践を対象としてきわめて克明に、実証的かつ独創的手法によって記述されている。本論文は、このような国立市公民館の学習実践の記録を通して、「実践と省察を架橋する社会教育学研究」を構築している。すなわち本論文は、従来の「社会教育」から、「社会教育学」への嚆矢の役割を演じていると言える。

（2）長期におよぶ公民館を拠点とする市民として、「おとなの女」としての協働的な学習のプロセス・組織とそれを通して構築された学習論・学習支援論の発展過程を、当事者自身の省察の記録の膨大な集積と組織にもとづき、形成史的に跡づけた本研究は、教育実践研究の膨大な歴史的展開と蓄積と照らしても、その実践と省察の長期的・重層的な組織の編成と展開においてそれらをこえる段階を示している。

（3）本論文において、50年にわたる協働社会の主体として相互的な学習過程とそれを支える学習コミュニティの長期的な形成過程が、その当事者自身による省察の記録を踏まえて描き出されている。エリクソンの心理社会的発達研究、そしてレイブ・ウェンガーの Situated Learning によって、学習の動態を相互行為・コミュニケーション・協働を媒介として個々人が、その協働プロセスに参与しつつ、そのコミュニティにおける役割の獲得を通してアイデンティティを形成していく多重のプロセスとしてとらえる視点・アプローチ、そして研究のフレームが提起されてきた。エンゲストロームやアージリス、ショーンらの企図もまた実践とそのコミュニティ・組織の中での学習の展開を解明するものとなっている。こうした実践とその組織・コミュニティにおける学習へのアプローチ

氏名　村田晶子

は、アージリス・ショーンの組織学習研究（Organizational Learning）からセンゲの「学習する組織」、ウェンガーらの『コミュニティ・オブ・プラクティス』をはじめとする組織改革と学習をめぐる研究と密接につながっている。教師教育研究においても、これら一連の学習研究の提起も受け、アン・リーバーマン、マイケル・フラン、アンディ・ハーグリーブスらをはじめ、教師の力量形成の基盤としての専門職学習コミュニティへの実践的な探究が進められ、教師教育改革のもっとも重要な方向となっている。

しかし、従来の学習研究が１時間、あるいは数時間の、きわめて限定された学習場面の分析、あるいは同様に短時間で行われるアチーブメントテストの評価に制約されている状況は、実践と研究の双方の側の拘束構造によって現在まで不断に拡大・再生産され続けている。ウェンガーの指摘によるまでもなく、学習を支えるコミュニティの形成過程は少なく見積もっても数年にわたる実践の積み重ね、変化と安定のプロセスを含む持続的なプロセスであり、従来の短時間のコンタクトによる外在的な観察・測定・介入の方法で跡づけていくことはできない。ショーンの『省察的実践者の教育』におけるもっとも長期的な事例分析が、自身とアージリスが継続的に取り組んできたコンサルテーションをめぐる 20 年にわたるゼミナールの展開であること、ウェンガーらの研究が企業の取り組みに長期にわたって関わってきたコンサルタントの経験に依拠していることが示しているように、超・長期的なコミュニティの形成過程の分析は、協働的な当事者としての省察のアプローチを不可欠のものとする。

こうした内在的な実践研究のアプローチの重要な研究と照らしても、国立市公民館における学習とそのコミュニティの発展過程とそれをめぐる本研究における内在的な解明のアプローチは、際だって長期的な形成過程の、またその当事者自身による克明な記録に基づく研究となっている。またこれらの記録の跡づけとともに、著者自身、この実践と学習の展開に当事者の一人、市民の一人として長期にわたって関わり、省察と研究を重ねてきたことも、研究の持続性と深化に関わる重要な条件として特筆しなければならない。こうした超・長期的な学習コミュニティ形成過程の内在的な跡づけを通して、実践と省察のコミュニティの編成とその形成過程が描き出されている。

子どもたちの相互的な成長を捉えようとする協働探究は、おとなとして互いの共同学習の在り方とそこでの成長への問い返しへと照らし返され、それがさらに子どもたちへの働きかけと自分たちの学習の展開へと活かされ、次の展開へと発展的に、また新たな問題を生み出しつつ循環していく。コミュニティのプロセスと組織の内部に互いの実践の省察とその共有の営みに照らし合う組織を編み込み、記録を介してさらに長期的また拡大的に実践省察のサイクルを編成しつつ培われたコミュニティは、学習するコミュニティ、実践し省察するコミュニティの多重の編成とその超長期的形成プロセスを自ら構成しまた明らかにする実践＝研究となっている。そして、本研究は、そうした実践者自身の省察・研究を踏まえつつ、その長大な、循環しつつ発展し重層化するプロセスとそのコミュニティを一連の展開として捉え返す新たな研究フレーム構築への挑戦となっている。それは、学習コミュニティの具体的な形成過程を照らし出すものとなると同時に、連動するもう一つの主題、民主主義的な公共社会とその主体の自己教育とを媒介する学習コミュニティ形成に、具体的な手がかりを与えるものとしてとらえることができる。そのことは、公共性と自己教育をめぐる問い、公教育をめぐる問いと直接的に結びついている。

以上から、審査員一同は、本論を博士学位の授与にふさわしいものと判断する。

公開審査会開催日	年　　月　　日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	細金恒男	教育学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	沖　清豪	教育学	
審査委員	早稲田大学・名誉教授	大槻宏樹	社会教育学	文学博士（早稲田大学）
審査委員	福井大学・教授	柳沢昌一	社会教育学	